

A TREASURY OF WORLD LITERATURE



新集 世界の文学

17

トルストイ

戦争と平和 I 原 卓也訳

中央公論社

トルストイ

訳者 原 卓 也

昭和43年 4 月30日初版印刷  
昭和43年 5 月23日初版発行

発行者 山 越 豊

本文整版印刷 三晃印刷株式会社  
扉・函貼印刷 求竜堂印刷株式会社  
口絵印刷 凸版印刷株式会社  
本文用紙 三菱製紙株式会社  
クロス 日本クロス工業株式会社  
函ボール 佐賀板紙株式会社  
製函 加藤製函印刷株式会社  
製本 小泉製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋 2 丁目 1 番地  
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

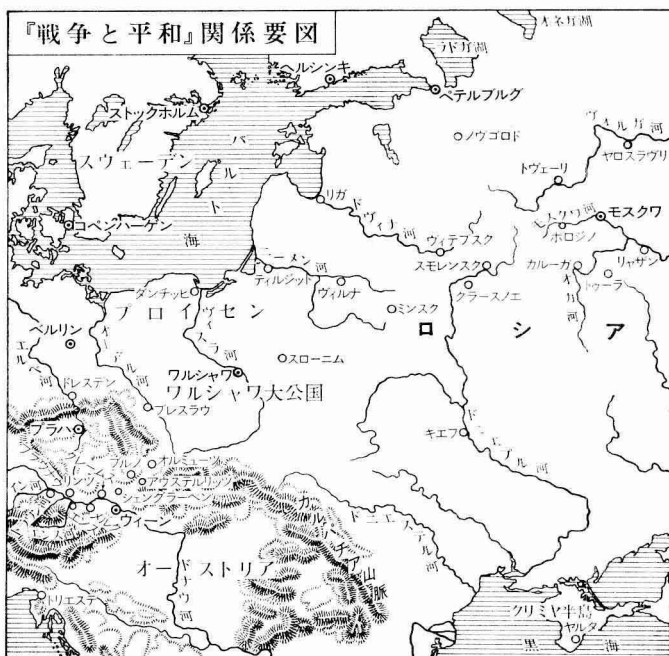
戦争と平和  
I

解説



戦争と平和  
I

# 『戦争と平和』関係要図



## 第一部

### 第一篇

#### 一

「それはそうと、公爵、ジェノアもルッカもボナバルト一族の領地になってしまいましたわね。<sup>\*</sup> いえいえ、わたくしあらかじめお断わりいたしときますけれど、もしあなたがこれでも、戦争がもうはじまっていることを認めようとなさらなかったり、あのアンチ・キリストの（ほんとにわたくし、あの男はアンチ・キリストだと信じてますのよ）卑劣さや恐ろしさを弁護なさったりするおつもりでしたら、あなたという方なぞもう存じあげませんわ。あなたはもう親しいお友達でもなければ、日ごろおっしゃってらっしゃるような、わたくしの忠実な僕でもございませんことよ。それにしても、よろこをお越しくださいましたわ。なんですか、わたくし、すっかりあな

たを驚かせてしまったようですわね。さ、どうぞおかけになって、お話を伺わせてくださいませな」

一八〇五年七月、皇太后マリヤ・フョードロヴナ（先帝一世の妃）のお側付き女官として令名の高いアンナ・シエーレルは、自分の夜会にまっさきに乗りつけた枢要な高官、ワシーリイ公爵を出迎えながら、こう言った。アンナ・パーヴロヴナはこの数日、咳がとまらず、当人に言わせればインフルエンザにかかっていた（当時インフルエンザというのは新しい言葉で、使う人もごくまだあった）。今朝、真つ赤な制服の召使にもたせて配られた案内状には、どれにも同じ文面でこう記されていた。

《Si vous n'avez rien de mieux à faire, M<sup>le</sup> comte (un mon prince), et si la perspective de passer la soirée chez une pauvre malade ne vous effraye pas trop, je serai charmée de vous voir chez moi entre 7 et 10 heures. Annette Scherer》

「伯爵（公爵）さま、もしほかに楽しいご予定もなく、哀れな病人のもとでの夜会という計画にさほど怖気（おそけ）をふるわれませんようでしたら、今夕七時から十時までの間に、わたくしどもの宅でぜひお目にかかりたく存じます。アンナ・シエーレル」

<sup>\*</sup> 一八〇五年五月、ナポレオンはリグリア共和国、つまりジェノアをフランスに併合、妹をルッカ公国の公に任じた。

「これはこれは、実に手きびしい攻撃ですな！」モール刺繍の宮中服に長靴下、短靴、数々の勲章という服装で入ってきた公爵は、こうした出迎えに少しもうろたえず、平たい顔に明るい表情をうかべながら、答えた。

彼は、われわれの祖父たちが話すときばかりでなく考えるときにも使った、磨きのかかったフランス語を話し、相手に花をもたせるような物静かなその語調は、社交界や宮中で年を重ねた高位の人間に特有のものだった。彼はアンナ・パーヴロヴナに歩みよると、香水のにおう、光沢のいい禿げ頭を近づけて、手に接吻し、ソファにゆったりと腰をおろした。

「それよりも何よりも、お身体の具合はいかがなんですか？ このわたしを安心させてくださいませんか」彼は声や口調をかえずに言ったが、そこには礼儀と同情のかけから、無関心と、からかいの色さえのぞいていた。

「健康にしていることなぞできますかしら……精神的な悩みをかかえているというのに？ 人なみの感情を持ち合わせていたら、今のような時代に平静にしてなぞいられませんでしょう？」アンナ・パーヴロヴナは言った。

「今夜は最後までいらしてくださいますんでしょね？」  
「でも、イギリス公使の祝宴があるでしょうに？ 今日  
は水曜なのでね。あそこにも顔を出しておかないと」公爵は言った。「あとで娘が迎えに寄って、連れていって

くれることになっているんですよ」

「今日の祝宴は中止になったのかと思っていましたわ。正直のところ、ああいう祝宴だの花火会だのが、ほとほといやになってまいりましたのよ」

「あなたがご所望だと知っていたら、祝宴も中止されたでしょうにね」真に受けてもらいたくないことを話すときの癖で、ねじを巻いた時計のようによどみなく、公爵は言った。

「そういじめないでくださいましな。ところで、ノヴォシリツォフの至急報の結果、どういうことに決まりました？ あなたは何もかも存じのはずですわ」

「なんと申しあげたらいいか」公爵は退屈そうな冷淡な声で言った。「どういうことに決まったかと、おっしゃるんでしょう？ つまり、ボナパルトが背水の陣をしいた以上、われわれも背水の陣をしく覚悟らしい、といったところですよ」

ワシーリイ公爵はいつも、役者が古い脚本の台詞でも読むような、ものうげな話し方をした。反対にアンナ・パーヴロヴナ・シェーレルは、四十歳という年齢にもかかわらず、生気と熱情にみちあふれていた。

感激家であることが、彼女の社会的立場になっていたもので、ときには、自分で望まぬような場合にさえ、彼女を知っている人々の期待を裏切らぬために、感激家にな

ることもあった。アンナ・バーヴロヴナの顔にたえずおどっている控えめな微笑は、花のさかりをすぎた容貌にはうつらなかつたものの、甘やかされた子供の場合と同じように、自分の愛すべき欠点を常に意識していることを示していた。その欠点を彼女は改めるつもりもなければ、できもせず、必要ともみなしていなかった。

政治の動きをめぐる会話の最中、アンナ・バーヴロヴナはついむきになった。

「まあ、わたくしにオーストリアのことなぞおっしゃらないでください！ そりゃ、わたくしなんぞ何もわからないかもしれないけど、でもオーストリアは一度だって戦争を望んだことなどありませんし、今だって望んでいやしませんわ。あの国はわれわれを裏切ろうとしているのです。ロシアはまったくの独力でヨーロッパの救い手にならなければなりませんのよ。陛下はご自身の崇高な使命を存じてらっしゃいますし、その使命をあくまでもお守りになることでしよう。われわれの善良な素晴らしい陛下の前に、世界でいちばん偉大な役割が控えているわけですけれど、陛下はあのように慈悲深い立派なお方ですもの、神さまがお見捨てになりませんとも。ですから、あの人殺しの大悪人の姿に化けて今やいっそう恐ろしくなった革命の大蛇（ヒドラー）を退治するというご自身のご使命を、陛下は立派にお果たしになるにちがいありません

わ。わたくしたちは、正義の士の血を自力で贖（あがな）わねばならないのです。だってそうじゃございませんか。いったいを当てるにすることができませんか。イギリスは持ち前の商人根性で、アレクサンドル皇帝の御心（みこころ）の崇高さなど、わかりそうもありませんし、わかるはずもありませんわ。マルタ島の撤兵を拒絶したくらいですもの。イギリスはわれわれの行動に何か下心を見いだそうとして、探しているのですわ。彼らがノヴォシリツォフになんと言いましたかしら？ 何も言わないじゃありませんか。ご自身のためには何一つ望まれず、世界の幸福のためにだけすべてを望んでおられる陛下の自己犠牲の精神が、彼らにはわからなかつたんです、理解できなかったんですわ。いったい彼らが何を約束してくれまして？ なんにも、ですわ。それに、約束したことだって、実現しないでしょうしね。プロイセンはプロイセンで、ナポレオンは無敵だ、全ヨーロッパをあげても彼に太刀打ちはできないと、はつきり宣言する有様ですし……わたくし、ハルデンベルク（プロイセンの政治家。列国と協力して、のちにナポレオンを破る）やハウフヴィツ（プロイセンの外相）の言葉なぞ、一言も信じません。評判の高いプロイセンの中立なんか、人を欺くポーズにすぎませんもの。わたくしが信ずるのは、神さまと、恵み深い陛下の崇高な運命だけですわ。陛下はきっとヨーロッパをお救いになれますとも！」彼女はふいに、自分がむ

きになりすぎたのを嘲笑<sup>ちょうしやう</sup>するように言葉をきった。

「わたしが思うに」公爵が微笑しながら言った。「もし、あの愛すべきヴィンツェンゲローデ<sup>ウエストフリアの男爵、将軍としてロシア軍に勤務した</sup>の代わりに、あなたが派遣されていたら、あなたはプロイセン王の同意を強引にもぎとってらしたでしょう。実に雄弁でいらつしやるから。ところで、お茶をちようだいできますか？」

「はい、今すぐに。それはそうと」彼女はまた落ち着きをとりもどしながら、つけ加えた。「今夜はとても興味のあるお客さまがお二方、お見えになられますのよ。お一人はモルトマール子爵で、この方はロアン家<sup>フランスの聖職者。革命に反対して亡命</sup>を通じてモンモランシ家<sup>宗教戦争で活躍した元帥を祖先とする名門貴族</sup>とはご親戚にあたりますの。フランスでもっとも名門の一つですわ。それから、もう一人はモリオ僧正。この学識の深い名僧はご存じですわね？ 陛下にもお目通りがかないましたのよ。ご存じでしょう？」

「ほう！ そりや楽しみですわね」公爵は言った。「それから、ついでお伺いしますけれど」彼は、今からたずねることが今日の訪問の主な目的だったにもかかわらず、さも何かをたった今思い出したといわんばかりに、ことさら何くわぬ様子でつけ加えた。「皇太后陛下が、ウィーンの一等書記官にフンケ男爵の任命を望んでらつしやるとかいうのは、本当ですか？ あの男爵はおよそつま

らぬ人間のように思われますがね」ワシーリイ公爵は、一部の人が皇太后マリヤ・フョードロヴナを通じて男爵に与えようと画策しているそのポストに、息子を据えたいと望んでいるのだった。

アンナ・パーヴロヴナは、皇太后陛下の御意にかなひ、お気に召していることについて、自分にせよほかのだれかにせよ、とやかく言うわけにはいかないというしるしに、目をほとんど閉ざした。

「フンケ男爵は、姉宮殿下が皇太后陛下に推薦なさいましたのよ」彼女は愁わしげなすげない声でそれだけ言った。アンナ・パーヴロヴナが皇太后の名を口にしたとき、その顔はふいに、愁いと一つに結びついた、忠誠と尊敬の深い真情をあらわしたが、話のなかで自己の高貴な庇護者の名を出すたびに、いつも彼女はこうなるのだった。皇太后陛下はフンケ男爵とても尊敬していらつしやると、彼女は言った。その眼差<sup>まざし</sup>はまたしても愁いにおおわれた。

公爵は無関心そうに黙りこんだ。アンナ・パーヴロヴナは、持ち前の女性らしい宮廷仕込みの如才なさど機転の早さで、皇太后に推薦された人物について批判がましい口をあえてきいた公爵をきめつけ、同時に慰めてやろうと思った。

「ところで、お宅のご家族のことですけれど」彼女は言

った。「ご存じですかしら、お宅のお嬢さまは社交界へお出になるようになって以来、社交界全体のあこがれになつてらっしゃいますのよ。真昼のように明るい素晴らしい方だと、みなさんおっしゃってらっしゃいますわ」

公爵は敬意と感謝のしるしに一礼した。

「わたくし、ときどき思うんですけれどもね」アンナ・パーヴロヴナは公爵のほうへ膝をすすめ、さながら政治や社交上の話はすでに終わって、これから心を打ち割った話からはじまるのだという意志表示をするかのように、

愛想よくほほえみながら語をついだ。「わたくし、よく思うんですけれど、人生の幸福って、時としてずいぶん不公平に配分されるものですわね。いったいどうして、

運命はあなたにあんな立派なお子さんを二人も授けたりしたんでしょう？ もっとも、ご次男のアナトリーさんは別ですけれど。わたくし、あの方はきらいですわ」彼女は眉をそびやかし、有無を言わさぬ口調でつけ加えた。

「ほんとに素晴らしいお子さんたちですことね。それなのに、あなたときたら、だれよりもいちばん認めておあげにならないんですもの、ほんとにあなたにはもったいないほどのお子さんたちですわ」

こう言つて彼女は感激したような微笑をうかべた。

「でも、仕方がないじゃありませんか？ ラーヴァター

（スイスのプロテスタント牧師。文筆家、人相学者として名高く、南方の魔術師といわれた）

）だつたらさしづめ、

わたしには父性愛などというよいけいな瘤はないと言つてのけるでしやうがね」公爵は言つた。

「冗談をおっしゃるのはおやめあそばせ。わたくし、まじめにお話ししようと思ひましたのに。あなたもご存じのとおり、わたくし、お宅の下の方ちやまには不満ですの。ここだけの話ですけれど」彼女の顔は愁わしげな表情になつた。「あの坊ちやまのことは皇太后陛下のところでも話題になりましてね、みなさんがあなたに同情なすつてらっしゃいますのよ……」

公爵は答えなかつたが、アンナは意味ありげに彼を見つめながら、無言で返事を待っていた。ワシーリイ公爵は眉をひそめた。

「わたしがどうすればいいと、おっしゃるんです？」やつと彼は言つた。「ご承知のように、わたしは息子たちの教育のために、父親としてできるだけのことはすべてやつてやりました。それなのに二人とも低能に仕上がりましたね。同じばかりでもイボリットのほうは、少なくともおとなしいからなんですが、アナトリーの方とよきたら、まったく素行がおさまらないので、これが唯一の違いですよ」いつもよりいっそう不自然に、強がりをみせて笑い、それにつれて口もとに刻まれた皺に何か意外なほど野卑な不快なものを、ひとときわくつきりと現わしながら、彼は言つた。

「それにしても、なぜあなたのような方のところにお子さんがおできになるんでしょうね？　もしあなたが父親でないとしたら、わたくしどんな点でもあなたを非難することができなかったでしょうけれど」アンナ・バーヴロヴナは考えこむように目をあげながら、言った。

「わたしはあなたの忠実な僕ですから、あなたには正直に打ち明けることができるんですが、うちの子供たちはわたしの存在をしるる足枷あしかせです。わたしの負うた十字架ですよ。わたしはそう解釈しているんですがね。いったいどうすればいいんでしょう？」苛酷な運命への恭順をしぐさで示しながら、彼はしばし沈黙した。

アンナは考えこんだ。

「あの放蕩息子ほうとうしこのアナトリーさんを結婚させてしまうことは、一度もお考えになりませんでしたのね」彼女は言った。「世間じゃ、オールド・ミスは仲人マニヤだなんて申しますわね。わたくし、べつにまだそういう病氣は感じてませんけど、ちやうど格好のお方がいらつしやるものですから。お父さまと暮らしてらして、とてもお気の毒でしてね。うちの遠縁にあたるボルコンスキイ公爵家のお嬢さまですの」ワシーリイ公爵は返事こそしなかったものの、社交界の人間に特有な判断と記憶のすばやさから、この話を考慮に入れたことを軽いうなずきによって示した。

「いや、ご承知かもしれませんが、あのアナトリーには年に四万ルーブルもかかりましてね」どうやら思考の悲しい歩みをとどめることができぬらしく、彼はこう言つて、また口をつぐんだ。「この調子でいったら、五年後にはどんなことになるものやら？　まったく、これが父親であることの利益なんですからね。で、その公爵令嬢という方は、資産がたくさんおありなんですか？」

「お父さまがたいへんな資産家で、しまり屋ですの。田舎暮らしをしてらつしやいましてね。ご存じでしょう、先帝の御代にもうご退役なさつて、一時は『プロイセン王』などという異名をとつた、あの有名なボルコンスキイ公爵ですわ。とても聡明なお方ですけれど、それは変人で、気むずかしいんですのよ。ですから氣の毒にお嬢さまは、石ころみたいに不幸せですの。お兄さまが一人いらつしやいましてね。ほら、ついこの間リーズ・マイネンと結婚なさつた、クトゥーゾフ將軍の副官ですわ。今夜わたくしどもへお見えになりますけれど」

「ねえ、アンナ・バーヴロヴナ」公爵はふいに相手の腕をとると、それをなぜか下へ曲げるようにしながら言つた。「このお話をぜひまとめてください、そしたらわたしはもう永遠にあなたの忠実な奴隷になりますから。うちの領地の村長がいつも報告書に書いてよこす言葉をかきとるなら、あなたの土隷にね。しかし、そのお嬢さんな

ら家柄もいいし、資産もありになる。わたしに必要なものは、すべてそろっているというわけですからね」

そして公爵は、彼の特色になっている、なれなれしきのこもった、気楽な、優雅なそぶりで女官の手をとり、接吻し、肘掛椅子にゆったり腰をおろすと、わきのほうを眺めながら、彼女の手を軽く振った。

「ちょっとお待ちになって」アンナ・パーヴロヴナは思案をめぐらしながら、言った。「わたくし今夜にでも、ボルコンスキイ公爵家の若夫人のリーザさんにお話ししてみますわ。ひょっとすると、とんとん拍子に運ぶかも知れませんわね。わたくし、あなたのご家庭でオールド・ミスの商売を勉強してみますわ」

## 二

アンナ・パーヴロヴナの客間は、しだいにたてこんできた。年齢や性格からいえば実にはさまぎまであるが、住んでいる社会という点で同じな、ペテルブルグの上流階級の人々がのりつけてきた。ワシーリイ公爵の娘である美貌のエレンが、父といっしょに公使の祝宴に行くため、迎えててら来た。彼女は舞踏会用のドレスを着て、シール（貴族女学校の優等卒業生や女官に与えられる、皇后のイニシアルを組み合わせたバツジ）を飾っていた。ペテルブルグでもっとも魅力的な婦人として評判の高い、小柄なボルコンスキイ公爵夫人も来た。彼女は去年の冬

に結婚し、最近では身重のため、宮廷の夜会には顔を出さずにいるのだが、内輪の夜会にはまだ姿をみせていた。ワシーリイ公爵の子息イポリット公爵は、モルトマール子爵と連れだつてきて、紹介した。モリオ僧正も、そのほか多くの人々もやつてきた。

「あなたはまだ、うちの伯母にお会いになったことはございませんでしたかしら？」とか、「うちの伯母とはお近付きいたしておりませんでしたかしら」と、アンナ・パーヴロヴナは、やつてくる客たちに言つては、客が集まりはじめたところに別の部屋から静々とあらわれでてきた、高い蝶リボンを飾った小柄な老婦人のところへ神妙な顔つきで案内し、視線を客から伯母へゆっくり移しながら、客の名をよんで引き合わせてから、わきに退くのだった。

客はみな、だれ一人知りもしなければ、興味も必要もないこの伯母にあいさつするという儀式を果たしていた。アンナ・パーヴロヴナは真剣な悲しい同情のこもった目で客たちのあいさつを見守り、無言のうちに賞讃を送っていた。伯母はどの客に対しても、まったく同じ表現で健康をたずね、自分の健康と、このごろでは幸いずっとよくなられた皇太后陛下のご健康とについて語った。歩みよる客はみな、礼儀上、急ぐそぶりはみせなかったが、気の重い務めを果たすとした気持で老女のそばを

離れ、あとはもう夜会の終わるまで決して近づこうとしなかった。

ボルコンスキイ公爵の若夫人は、金糸の刺繍をあしらったビロードのバッグに、やりかけの手芸を入れてやってきた。うつすらと黒ずんだうぶ毛の生えている愛くるしい上唇は、歯並みにくらべて短かったが、そのためにかえって上唇の開いているのが可愛らしく、時折それがのびて下唇と結ばれるところなど、いっそう可愛らしかった。きわめて魅力的な女性には常にあることだが、唇が短くて口もとがいつもほころび加減になっているというこの欠点も、彼女だけの持つ一種特別な美しさに思われた。身重の状態をこうして気楽に堪え忍んでいる、健康と生気にみちた、この美しい未来の母を見ているのは、だれにとっても楽しいことだった。年寄りや、退屈しきった陰気くさい若者たちも、彼女としばらくすごし、少し話をかわすと、自分たちまで彼女に似ていくような気がした。彼女と言葉をかわし、ひとこと言うたびに浮かべる明るい微笑と、たえずのぞいている真っ白に輝く歯並みを見た者は、自分は今夜はとりわけ愛想がいいと思った。そして、これはだれもが思うことだった。

小柄な公爵夫人は、仕事のバッグを手にしたまま、身を左右に軽くゆすりながら、小さな早い足どりでテーブルをひとまわりし、銀のサモワールのわきのソファに腰

をおろした。さながら、自分が何をしてもそれはすべて、自分にとっても、周囲の人たちみなにとっても、楽しみなのだ、というばかりだった。

「あたくし、お仕事を持ってまいりましたのよ」バッグをひろげ、みなに同時に話しかけるように彼女は言った。「いけませんわ、アンネット、たちのわるい悪戯をなさらないでくださいましな。あなたのお手紙に、今夜はごくさやかな夜会だなんて書いてございましたでしょ。」

「ごらんないな、あたくしったらこんな服装をして」そして彼女は、胸の少し下を広いリボンで結わえた、レースずくめの、垢ぬけたグレイのドレスを見せるために、両手をひろげた。

「ご安心なさいな、リーザ。あなたはやつぱり、いちばんお美しくいらつしやいますもの」アンナ・パーヴロワは答えた。

「ご存じでらつしやいますか、うちの主人はあたくしを見捨てようとしてますのよ」彼女はさる將軍に顔を向けながら、同じ口調でつづけた。「死に赴こうとしています。ほんとに、なんのためにこんな忌わしい戦争なんかがあるんでしょうね」とワシーリー公爵に言い、返事を待たずに、その娘である美しいエレンをかえりみた。

「なんて可愛らしいお方でしょうな、この小柄な公爵夫人は！」ワシーリー公爵が小さな声でアンナ・パーヴロ

ウナに言った。

小柄な公爵夫人のあとまもなく、今度は、髪を短く刈りこみ、眼鏡をかけて、当時流行の明るい色のズボンに、高い襟、茶色の燕尾服（たんぷく）という服装の、でっけり太った青年が入ってきた。この太った青年は、エカテリーナ女帝時代の有名な高官で現在モスクワで危篤の床に伏せているベズーホフ伯爵の私生児だった。彼はまだどこにも勤務しておらず、ずっと教育を受けていた外国からもどつたばかりで、社交界にもこれがはじめてだった。アンナ・パーヴロヴナは、自分のサロンにおけるもっとも低い階層の人に対するような会釈で、彼を迎えた。しかし、種類からすれば最低のこうした迎えぶりにもかかわらず、入ってきたピエールを見ると、アンナ・パーヴロヴナの顔には、ちょうど何か、場所にそぐわぬ、あまりにも巨大なものでも見たときのような、不安と恐れとがあらわれた。たしかにピエールは、この部屋にいる他の男たちよりいくぶん大柄ではあったけれど、彼女の恐れは、客間にいるすべての人たちからこの青年をはつきり際立たせている、その聡明な、と同時に内気な、観察力の鋭い、ものにとらわれぬ考え方に対して、もっぱら向けられているらしかった。

「まあ、ピエール、哀れな病人を見舞ってくださいるなんて、あなたにしてはずいぶんご親切なことですね」青

年を伯母のところへ案内し、びくびくもので伯母と視線をかわしながら、アンナ・パーヴロヴナは言った。ピエールは何やら要領を得ぬことをつぶやき、何かを目で探しつつ聞いていた。親しい知人である小柄な公爵夫人に会釈しながら、彼はうれしそうに明るく微笑し、伯母に歩みよった。アンナ・パーヴロヴナの恐れは、やはり事実となつてあらわれた。なぜならピエールは、皇太后陛下の健康を語る伯母の話をしまいまで聞かずに、離れてしまったからである。アンナ・パーヴロヴナは驚いて、彼をよびとめた。

「モリオ僧正を存じてらして？ とても興味深い方ですよ……」彼女は言った。

「ええ、あの人の永久平和の計画というのを聞きました。あれはとてもおもしろいけど、はたして実現できますかね……」

「そうお考えになる？」とにかく何か言ってから、ふたたび女主人の仕事に立ちもどるため、アンナ・パーヴロヴナはこう言ったが、ピエールは今度はさつきとは反対の無作法を働いた。先ほどは、相手の話をしまいまで聞かずに離れ去ったのだが、今度は、ほかへ行かねばならぬ相手を長話で引きとめたのである。首をかしげ、大きな両足を広く踏まえて、彼は、なぜ僧正の計画を実現不可能な夢とみなすかを、アンナ・パーヴロヴナに論証し

にかかった。

「お話はいずれのちほど」アンナ・パーヴロヴナはっこりして言った。

処世の術をわきまえぬこの青年から逃れて、女主人の仕事に立ちもどると、彼女は、会話の調子のおちたところへいつでも助け舟を出せる体勢で、耳をすまし、目をくぼりつづけた。紡績工場の主人は、所定の位置に職人をつけたあと、工場の中をまわって歩き、機械の停止や耳なれぬ、異常に高い車軸の軋み音に気づくと、急いでそこに行き、車軸をおさえたり、正常の速度で回転させたりするものだが、それとまったく同じようにアンナ・パーヴロヴナも、客間の中をまわって歩きながら、黙りこんでしまったグループや、話のはずみすぎているグループのところに行つては、一言さしはさむなり、客の組合せを変えるなりして、また会話という機械を円滑にきちんと回転させるのだった。しかし、そうした心くぼりの間にも、ピエールに対する一種特別な恐れはたえずうかがわれた。ピエールがモルトマール子爵を囲んで話されていることを聞きにいき、やがて僧正の話している別のグループのほうへ去つていったにもかかわらず、彼女は気づかわけに何度か彼のほうを眺めやっていた。外国で育てられていたピエールにとって、アンナ・パーヴロヴナのこの夜会は、ロシアで見る最初のものだった。

ペテルブルグの全インテリゲンチヤがここに会していることを知っていたので、ちょうど玩具屋に入った子供のよう、に移りがしてならなかった。せっかく聞けるかもしれない聡明な会話を聞きのがしてはと、彼はたえず恐れていた。ここに集まっている人々の、自信にみちた上品な表情を見守りながら、彼は終始何かとりわけ聡明な話を期待しつづけていた。最後に彼はモリオ僧正のほうに行つた。会話が興味深く思われたので、彼は足をとめ、青年たちが好んでやるように、自分の考えを口に出す機会を待ち受けた。

### 三

アンナの夜会は円滑に運転されはじめた。車軸はそこかしこで規則正しく、とだえることなしに音を立てていた。この絢爛たる社交界にはいきさか場違いな、泣きはらしたような痩せた面立ちの、中年の夫人が一人わきに付き添っているだけの、伯母さまを除いて、全体が三つのグループに分かれていた。

第一の、どちらかというとも男性中心のグループでは、僧正が中心になっていた。第二の、若い人たちのグループの中心は、ワシーリイ公爵の令嬢である美貌のエレンと、その若さにしては太りすぎている、ばら色の頬をした愛くるしい小柄なボルコンスキイ公爵夫人とで、第三